

—平成十八年度 春期企画展—

こまばおやくえん

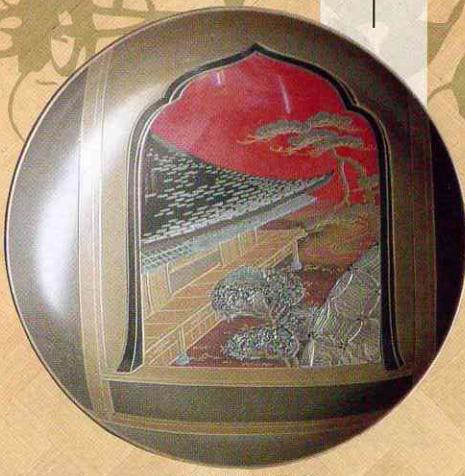
ほんぞうがく

駒場御茶園と本草学

—園監植村家関係資料をひもとく—

植村左兵衛政勝

植村家家紋



盃(徳川家持領)

平成19年 3月10日(土)～6月3日(日)

休館日 3/12・19・22・23 4/9・16・23・27 5/1・7・14・21・25・28

開館時間 午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)

入館料 一般150円 高校生・大学生100円 小学生・中学生50円(20人以上団体割引あり)

狹山市立博物館

〒350-1324

埼玉県狹山市稻荷山1-23-1(狹山稻荷山公園内)

TEL(04)2955-3804 FAX(04)2955-3811

<http://www.city.sayama.saitama.jp/museum/>

- 西武池袋線「稻荷山公園駅」より徒歩3分
- 西武新宿線「狹山市駅」西口よりバス「稻荷山公園駅行」終点徒歩3分
- 圏央道狹山日高インターより車で15分



開催にあたって

天然痘、麻疹、水疱瘡さらには結核、癌など、その昔「不治の病」と呼ばれていたものの多くが、医療技術の進歩により克服されてきました。その一方で高齢社会を迎え、健康に関する話題が多く語られている昨今です。狭山市は、狭山茶の生産地としてその一翼を担っていますが、古く最澄、榮西らによってもたらされた茶は、薬用として珍重され、茶園と呼ばれる「薬園」で栽培され、生産管理されていました。

今回は、資料所蔵者のご好意により、江戸目黒にあった幕府直轄の駒場御薬園に係る資料と、併せて当館蔵の植物資料である遠藤信次郎氏収集標本を紹介します。駒場御薬園の園監であった植村家は、薬用植物の採集と育成栽培を主とし、その業績は江戸時代後半の医療に大きく貢献し、本草学の基礎となる分類同定に重要な役割を果たしました。当時の医薬学書の変遷を交えながら紹介していきたいと思います。また併せて展示する遠藤信次郎氏収集標本は、狭山市内在住であった同氏が市内周辺で採集した1,700点余の植物を同定保存したもので、この地域の植生を知る上で重要なものです。今回は、この中から薬用植物を中心に展示します。

本草学は、現在あまり顧みられない学問ですが、その研究手法は、本草学から博物学、さらには博物館の事業手法に継承されてきています。狭山市立博物館の活動とともに、本草学の紹介と、多くの学問研究の基盤には、ひとりひとりの人間が深く係わっているところを、多くのみなさまにご覧いただければ幸いと存じます。

最後になりましたが、本企画展の開催にあたり、資料提供のほか、展示にご協力いただきました関係各位に厚くお礼申し上げ、開催のあいさつといたします。

平成19年3月

狭山市立博物館

関連事業

1.展示解説

日 時 3月17日(土)、4月14日(土)、5月12日(土) 各10:00~
場 所 博物館 企画展示室
講 師 担当学芸員
対 象 一般

2.練香づくり体験

練香(5~6粒)をつくります。
日 時 4月21日(土)11:00~12:30と14:00~15:30
場 所 博物館 茶室
対 象 一般
募集中人数 各18人
参 加 費 2,000円(材料費、香料を含む)
講 師 香道古心流・師範 黒須秋桜 氏
協 力 狹山市文化団体連合会 狹山香道俱楽部
申しみ 2月21日㈬9:00より電話にて予約。

3.植物園見学

薬用植物を栽培研究している東京都薬用植物園を見学します。(現地集合)
日 時 4月28日(土)9:30~12:00
場 所 東京都小平市 東京都薬用植物園(西武拝島線東大和市駅下車)
対 象 一般・子ども
募集中人数 20人
参 加 費 100円(資料代、保険料として)
申しみ 3月21日㈬9:00より電話にて予約。

*詳細については、電話またはホームページでご確認ください。



狭山市立博物館

〒350-1324
埼玉県狭山市稻荷山1-23-1(狭山稻荷山公園内)
TEL(04)2955-3804 FAX(04)2955-3811
<http://www.city.sayama.saitama.jp/museum/>
●西武池袋線「稻荷山公園駅」より徒歩3分
●西武新宿線「狭山市駅」西口よりバス「稻荷山公園駅」終点徒歩3分
●圏央道狭山日高インターより車で15分

—平成十八年度 春期企画展—

こまば
おやくえん

ほんぞうがく

植村家と本草学

—園監植村家関係資料をひもとく—

植村家と本草学

植村家家紋



盃(徳川家持領)

平成19年 3月10日(土)～6月3日(日)

休館日 3/12・19・22・23 4/9・16・23・27 5/1・7・14・21・25・28

開館時間 午前9時～午後5時(入館は午後4時30分まで)

入館料 一般150円 高校生・大学生100円 小学生・中学生50円(20人以上団体割引あり)

狭山市立博物館

〒350-1324

埼玉県狭山市稻荷山1-23-1(狭山稻荷山公園内)

TEL(04)2955-3804 FAX(04)2955-3811

<http://www.city.sayama.saitama.jp/museum/>

- 西武池袋線「稻荷山公園駅」より徒歩3分
- 西武新宿線「狭山市駅」西口よりバス「稻荷山公園駅行」終点徒歩3分
- 圏央道狭山日高インターより車で15分

開催にあたって

天然痘、麻疹、水疱瘡さらには結核、癌など、その昔「不治の病」と呼ばれていたものの多くが、医療技術の進歩により克服されてきました。その一方で高齢社会を迎え、健康に関する話題が多く語られている昨今です。狹山市は、狹山茶の生産地としてその一翼を担っていますが、古く最澄、榮西らによってもたらされた茶は、薬用として珍重され、茶園と呼ばれる「薬園」で栽培され、生産管理されていました。

今回は、資料所蔵者のご好意により、江戸目黒にあった幕府直轄の駒場御薬園に係る資料と、併せて当館蔵の植物資料である遠藤信次郎氏収集標本を紹介します。駒場御薬園の園監であった植村家は、薬用植物の採集と育成栽培を主とし、その業績は江戸時代後半の医療に大きく貢献し、本草学の基礎となる分類同定に重要な役割を果たしました。当時の医薬学書の変遷を交えながら紹介していきたいと思います。また併せて展示する遠藤信次郎氏収集標本は、狹山市内在住であった同氏が市内周辺で採集した1,700点余の植物を同定保存したもので、この地域の植生を知る上で重要なものです。今回は、この中から薬用植物を中心に展示します。

本草学は、現在あまり顧みられない学問ですが、その研究手法は、本草学から博物学、さらには博物館の事業手法に継承されてきています。狹山市立博物館の活動とともに、本草学の紹介と、多くの学問研究の基盤には、ひとりひとりの人間が深く係わっているところを、多くのみなさまにご覧いただければ幸いと存じます。

最後になりましたが、本企画展の開催にあたり、資料提供のほか、展示にご協力いただきました関係各位に厚くお礼申し上げ、開催のあいさつといたします。

平成19年3月

狹山市立博物館

協力者(敬称略)

遠藤 謙 高橋彦一 狹山市植物友の会

なお、植村家関係資料につきましては、所蔵者のご意向により、ご芳名を伏せさせていただきました。ご了承ください。

主要参考文献

『日本薬園史の研究』 上田三平著 1930

『日本薬園史の研究』 上田三平著 1930 改訂増補版 三浦三郎編 渡辺書店 1972
『年表日本博物学史』 上野益三著 八坂書房 1989

『駒場薬園史考』 一瀬幸三著(「郷土目黒」第二十輯 目黒区郷土研究会 1976)
『目黒区史』 東京都立大学学術研究会編 目黒区 1961

『週刊朝日百科日本の歴史82 本草の世界と鉱山町』 朝日新聞社 1987
『薬草図鑑』 伊沢凡人、会田民雄著 家の光協会 1999
『薬草』 井波一雄著、会田民雄写真 山と渓谷社 1983 (野外ハンドブック11)

『養生訓』 貝原益軒著、伊藤友信訳 講談社 1982 (講談社学術文庫)
『中国名医列伝』 吉田莊人著 中央公論社 1992 (中公新書)
『日本医学史綱要』12 富士川游著 平凡社 1974 (東洋文庫)

凡例

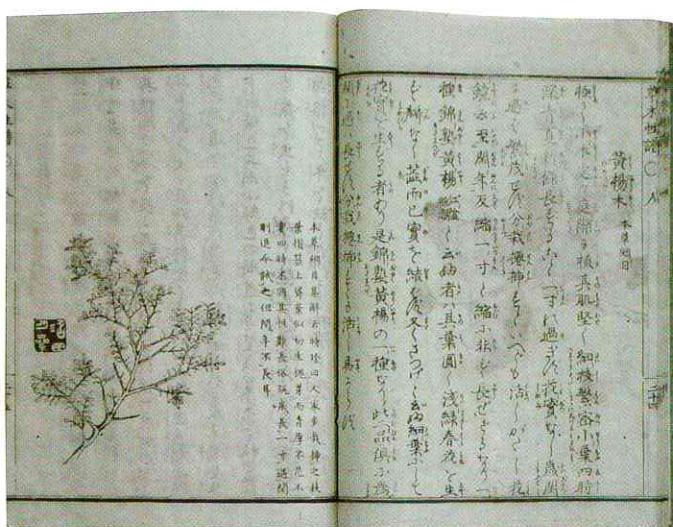
- これは、平成19年3月10日(土)から6月3日(日)まで開催する平成18年度春期企画展「駒場御薬園と本草学—園監植村家関係資料をひもとく—」のパンフレットです。
- 今回の企画展は、狹山市内所蔵の資料と当館蔵の資料により、江戸時代の本草学と当時の医学・薬学について紹介したものです。
- 展示資料並びに薬用植物の番号は、本企画展での資料の整理番号で、展示順と必ずしも一致しません。
- 薬用植物については、参考文献に基づき同定展示しておりますが、服用等につきましては、医師、薬剤師にご相談ください。

本草学とは

本草学とは、薬物学の一部で、現在では科学体系が細分化されたことから、あまり研究されなくなった学問のひとつです。現代の医薬品は、薬効成分を抽出、あるいは化学合成して生産されますが、このような技術がない時代では、薬効のあるものを採集(採薬)し、利用することが薬を得る唯一の方法でした。この薬効のあるものを探索する方法から発達した学問が本草学です。

古代の本草学では、薬効から「上品、中品、下品」の薬に分けられ、「上品」は当時の理想であった不老不死の道が開けるとされ、「中品、下品」は保健薬、治療薬から劇薬、毒薬まで含まれ分類されていました。これが中世になると、さらに種別を中心に分類され、「草、木、禽(鳥)、獸、金、石」や「呪い、魔よけ」などに細分化されていきました。

江戸時代当時、漢方薬は、製品化されたものが中国などから輸入されていましたが、たいへん高価なものでした。そのため薬の原料となる薬草木を活かしたまま、手に入れようとしたが、長い船便のため、運び込むことはほとんどできませんでした。さらに、日持ちする根菜類にしても、生育地や産地との気候のずれや、長旅による疲弊から、栽培を成功させることは極めてまれでした。このため、漢方医学を知るものは、その薬効もさることながら、日本で良薬を生産できないことに限界を感じていました。そこで日本では、中国から入った本草学の図鑑から、中国産名の薬草木の図を日本産名の植物と比較し、同じ効果のあるものをさがすこと(同定)が研究されました。この研究成果によって、日本において本草学は、独自の発達をしてきたといえます。



『草木性譜』 清原(舍人)重臣 著

れるようになりました。現在本草学は、たとえば草木については植物学、禽(鳥)獸については動物学、金石については地質学・鉱物学などのように学問的に細分化され、それぞれの分野で分類学が体系化されています。実物資料は自ら自分の名前を答えることがないので、現在でも

このころ中国は明清の時代で
李時珍の『本草綱目』という大著が
編纂され、日本にもたらされました。
この著作から比較研究を加え、
貝原益軒が『大和本草』という日本
向けの薬草木の図鑑を完成させました。
これにより、多くの漢方薬
の代替薬が発見開発され、普及して
いきました。さらに西洋文化が
流入し、写実的な絵画技法が伝え
られると、いろいろな図鑑が出版
され、製薬の需要のみならず盆栽・
花卉などの園芸の流行にも応えら

それぞれの分野での分類学の世界では、同定の作業が日夜続けられています。同定という本草学での基礎的研究は、対象資料の拡大と多くの人に広く見ていただくという目的により、博物学へと発展していきます。さらに現在では、同定が博物館の中心的活動である資料の調査・研究の中のひとつの作業として重要な役割を果たしています。

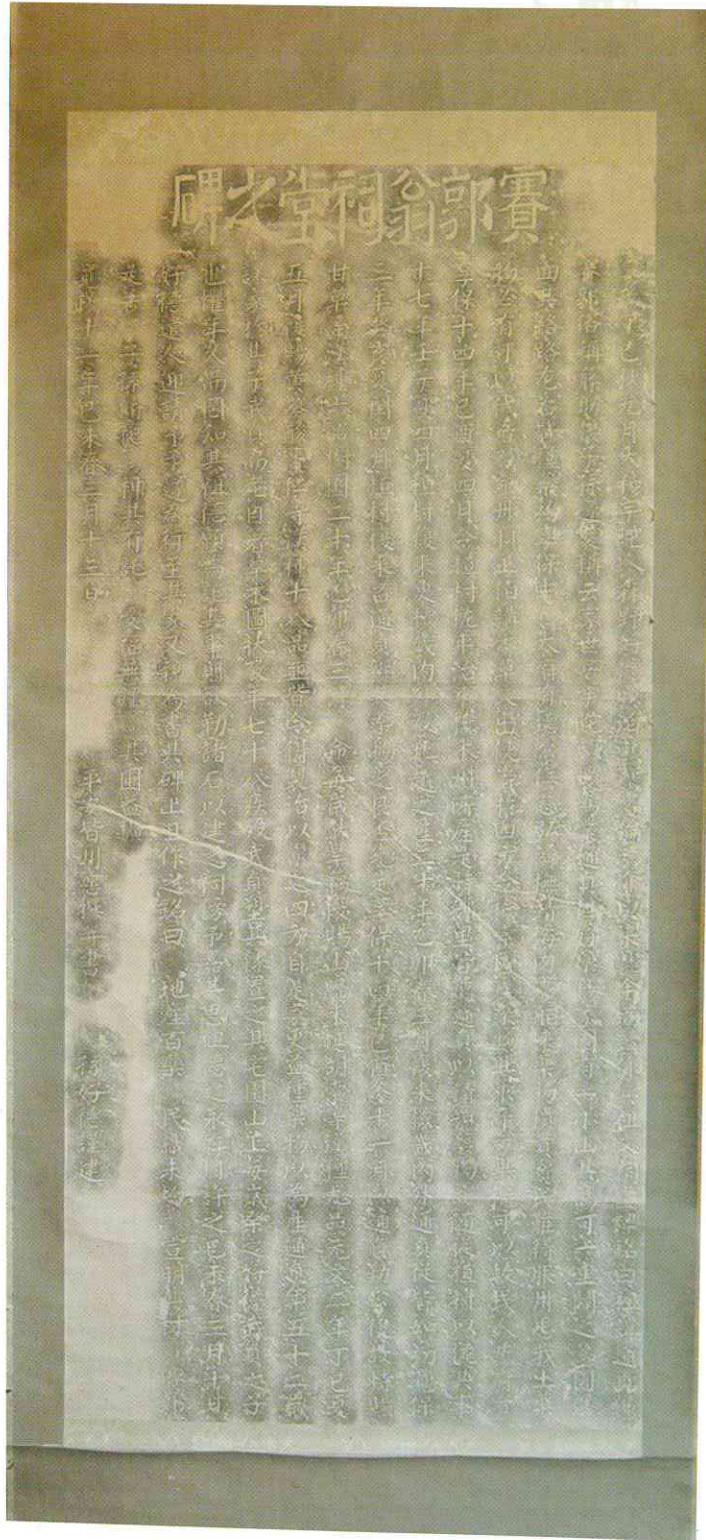
薬園の歴史

薬園は、薬用の植物(薬草木)を栽培して、これを製薬する施設です。奈良時代の法制である律令の中に典薬寮の職名に薬園師・薬園生等があることから、8世紀初めには薬園が存在していたと考えられます。狭山市は、狭山茶の生産地としてその一翼を担っていますが、古く最澄、榮西らによってもたらされた茶は、薬用として珍重され、寺院内の茶園で栽培され、生産管理されていました。この茶園も当時の薬園のひとつとして数えることができるでしょう。その後、薬園は制度上では大きな変化は見られませんでしたが、江戸時代には、薬学については薬活と呼ばれ、徳川家康は自ら飲む薬を調合して、自分の健康維持に努めしていました。このようなことから、江戸時代初期には薬園が、幕府の鎖国政策とあいまって長崎出島を窓口として流入される海外の文物とともに、特に当時の医療の本流であった漢方に使われた薬草木や珍しい植物を受け入れる役割をになっていました。しかし、輸入される薬草木は限られ、また、日本の風土と合わず栽培できないものもありました。このため、当然薬草木は、貴重で高価なものにならざるを得ませんでした。

江戸時代中期になり、医療が一般民衆にも普及するようになると、薬の原料となる薬草木の需要は高まっていきました。このため、徳川吉宗は、「禁書」の制度を緩和し、洋書の流入に努め、国内の有用植物を探索させたり、外国産の種苗を入手して増殖させるなどの政策を進めていきました。その拠点となったのが、小石川御薬園と駒場御薬園でした。これに呼応して各藩においても薬園が開設されました。

中期から幕末にかけては、薬園の役割は薬用食用の植物を探し、採取収集栽培することで、農政に活かす、飢饉に備える、産業をおこす、など藩政に活かす目的を持つようになりました。このため、藩の大小に限らず、全国的に薬園の開設は広がり、さらには、薬を扱う商人(薬種商)までが、薬園を設置したことが知られています。

薬園は、輸入医薬品原料の代用となる国内の薬草木の「見本」を集めた植物園の役割を果たしました。そしてこのことは、標本となる植物を植え、管理することで、日本に自生している薬草木の鑑別を可能にしました。直轄の薬園であった駒場御薬園は、江戸幕府の滅亡とともに閉鎖されますが、小石川御薬園については、その施設が明治政府に引き継がれ植物園となり、東京大学付属小石川植物園として現在に至っています。

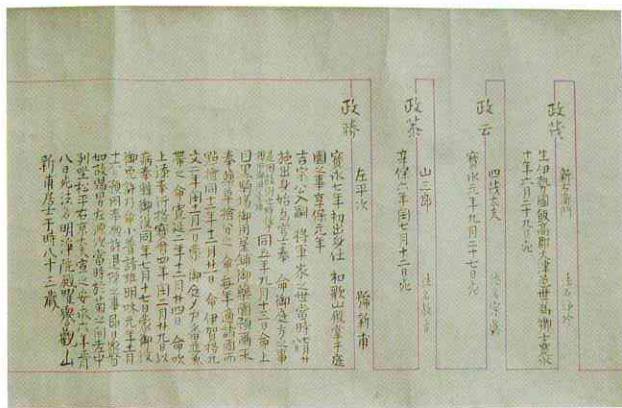


拓本「賽郭翁祠堂之碑」

もりのとうすけ さいかく
森野藤助(賽郭)は、植村政勝の大和国周辺採薬御用の案内人となり、この行賞として公儀から、薬草の一部を拝領した。これを元に藤助が開設した私設の薬園「森野薬園」は、「吉野葛」の綽本舗として現在に至っている。

駒場御薬園と植村家

享保元年(1716)徳川吉宗の八代将軍職就任により、それまで中絶していた鷹狩が再興され、幕府の御薬場が開設されました。そのひとつが江戸目黒におかれた駒場野の御薬場です。ここは、元は上、中、下目黒村の入会林場で、総面積16万坪といわれた広大な敷地に雉・鶴などの鳥類、猪・狼・兔などの獣類が多く生息していました。これを管理したのが目黒御用屋敷で、上目黒村名主加藤織部の土地を伊予宇和島藩伊達家に献上、下屋敷であったところをさらに幕府に献上され、5万5千坪の敷地がありました。この中には、鷹狩の際の將軍の御膳所、御休憩所(御腰掛)のほか、鷹狩の準備・薬場の管理を担当する鳥見役所と、御薬園がありました。

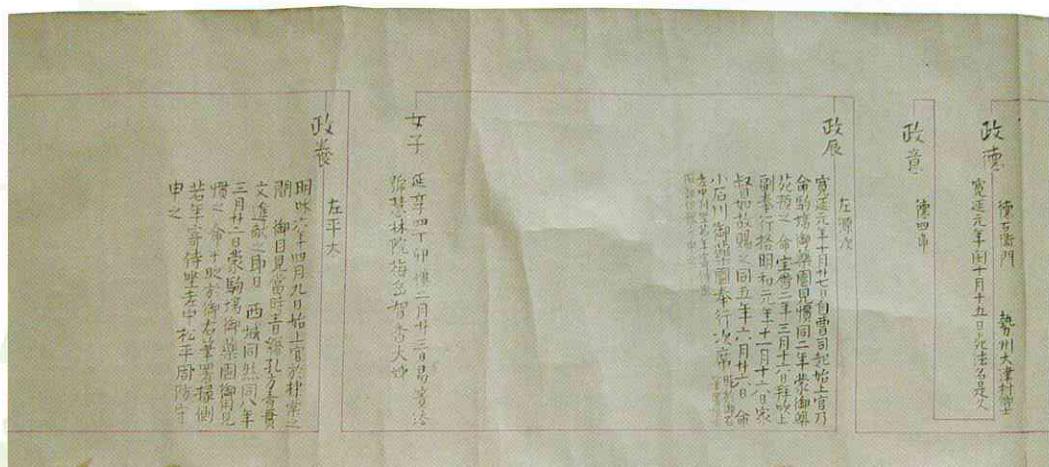


植村家系図 政勝の項

この駒場御薬園の管理をまかされたのが、植村左平次政勝(元禄8(1695)—安永6(1777))です。政勝は和歌山藩領であった伊勢国飯高郡大津杉村(松阪市大津町)に生まれ、宝永7年(1710)和歌山藩御庭方となり、享保元年(1716)徳川吉宗の八代将軍職就任により江戸に移住して、奥御庭方となりました。

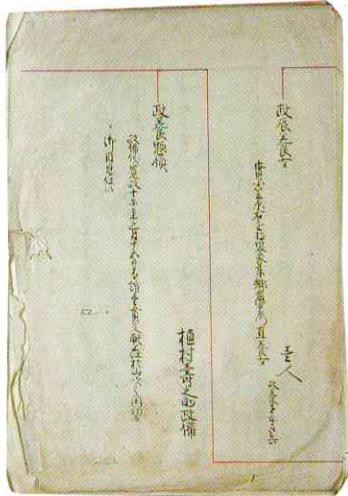
そして享保5年(1720)駒場御薬園の開設にあたり、園監となりました。以来

宝暦3年(1753)まで幕府の命により、隠密用務を含めた採薬活動のため、全国を回ることのべ100回を優に越える多数の薬草の産地を探り、また、それを移植し生育状況を調べ、栽培への端緒を開きました。このことは、当時諸藩で精力的に普及させていた農書の内容を向上させ、また、盆栽・花卉などの園芸作物の品種改良などにも文化的影響を与えました。その後、駒場御薬園の園監は、代々植村家の世襲とされ、左源次政辰、左平次政養、左平太政備、左平太政樹と5代つづき、幕末を迎えることとなります。

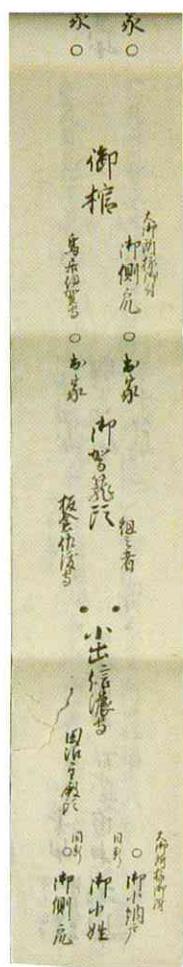


植村家系図 政辰、政養の項

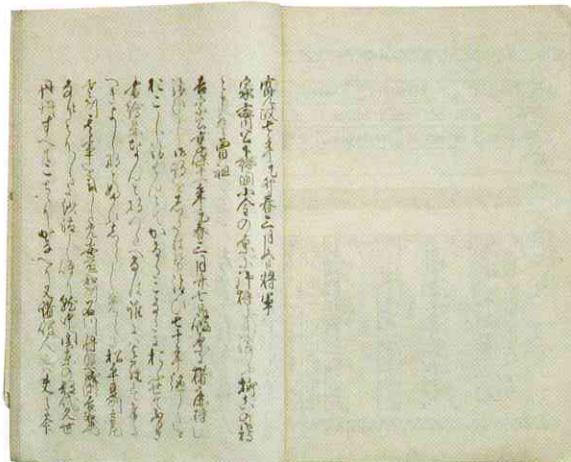
今回紹介している駒場御薬園は、享保5年(1720)9月幕府直轄の薬園として、この目黒御用屋敷に開設されました。当初御用屋敷内の1万坪を預かり、御用により全国で採集した薬草を植えつけ、次第にその数を増やしていきました。『日本薬園史の研究』によると、安政6年(1859)12月の古文書には当初の薬園として東御薬園、さらに西御薬園、植村左平太御役宅などが絵図面に描かれています。東西の御薬園には、広大な添地(拡張地)がつき、植村左平太御役宅には、御製薬所・御薬種干場・園附の者の御長屋などがありました。東御薬園と添地、西御薬園の面積をあわせると、ほぼ1万坪強となることから、開設時の様子を知ることができます。また、西御薬園の添地は、御用屋敷の外に見られることから、新地として追加されたものと考えられ、ここには、畠とともに、物見台や桜並木などがありました。これらの面積を合計すると、40,947坪に拡大していました。



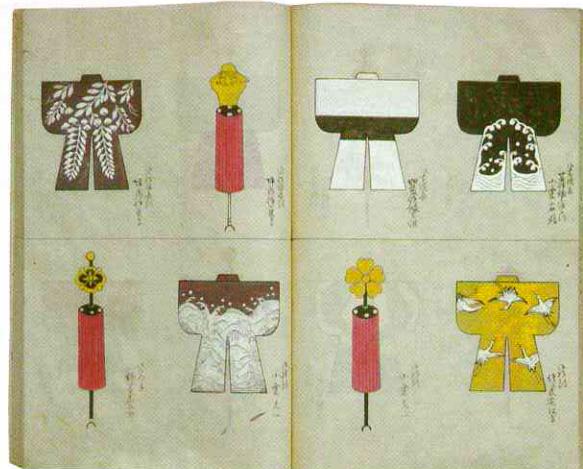
『先祖書』 政備の項



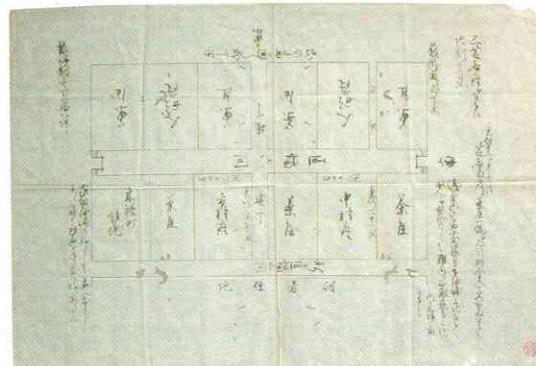
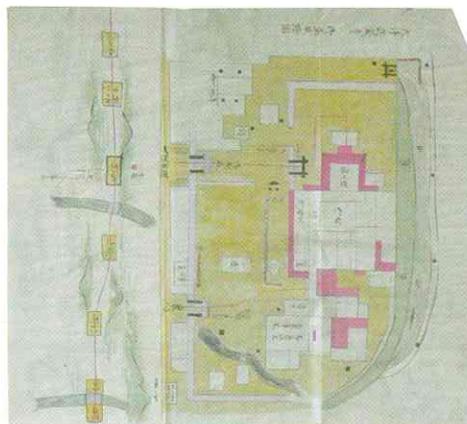
『御出棺御葬送御行列之覚』



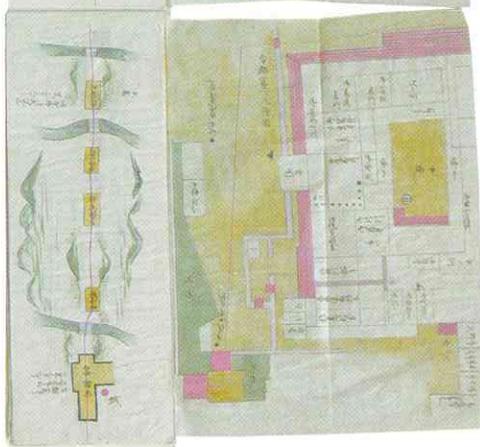
『小金原鹿狩図記』 上



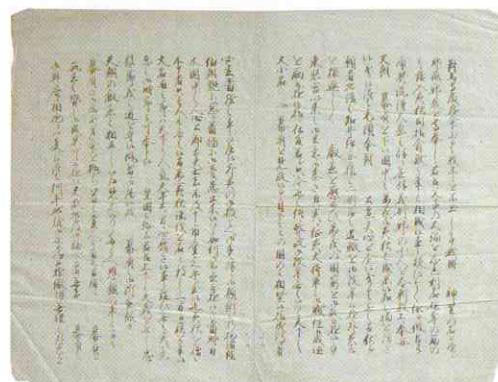
『小金原鹿狩図記』 下



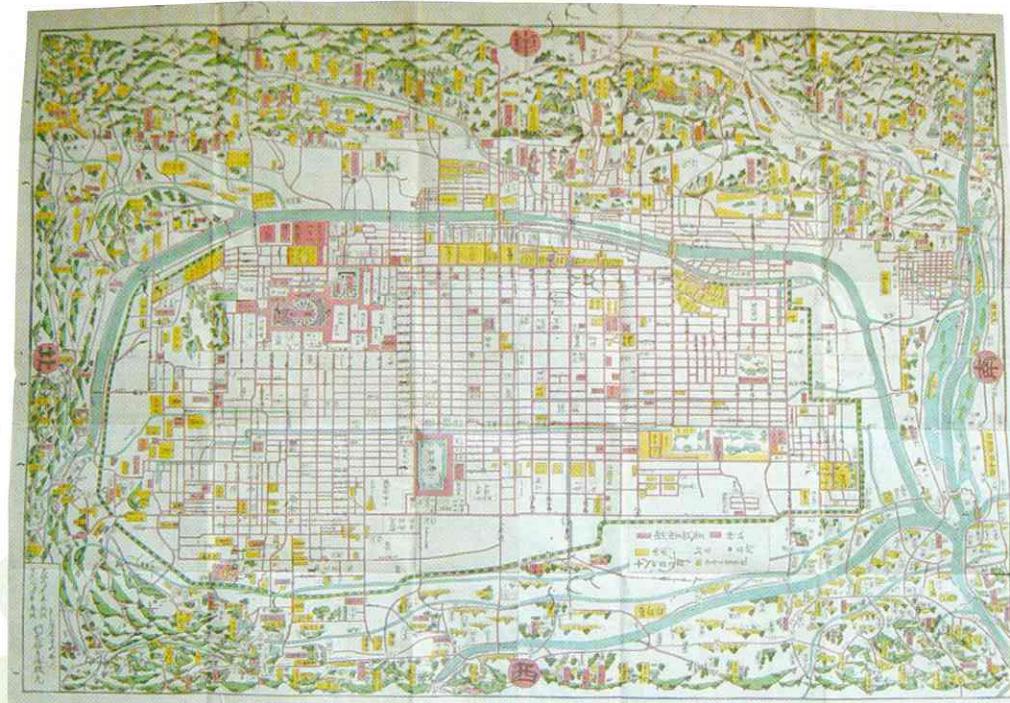
「三芝居座江被下候地割之図」—芝居小屋移転一件—



『日光御社参御道中御宿泊御昼夜所の図』



「控」—尊皇攘夷に係わる一件—



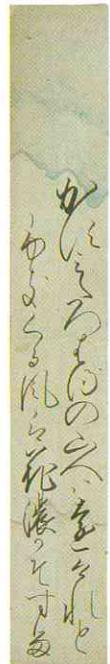
『新增細見京絵図大全』



短冊 なかやま
中山
大納言兼親 筆



短冊 清健筆
目黒御薬園にて



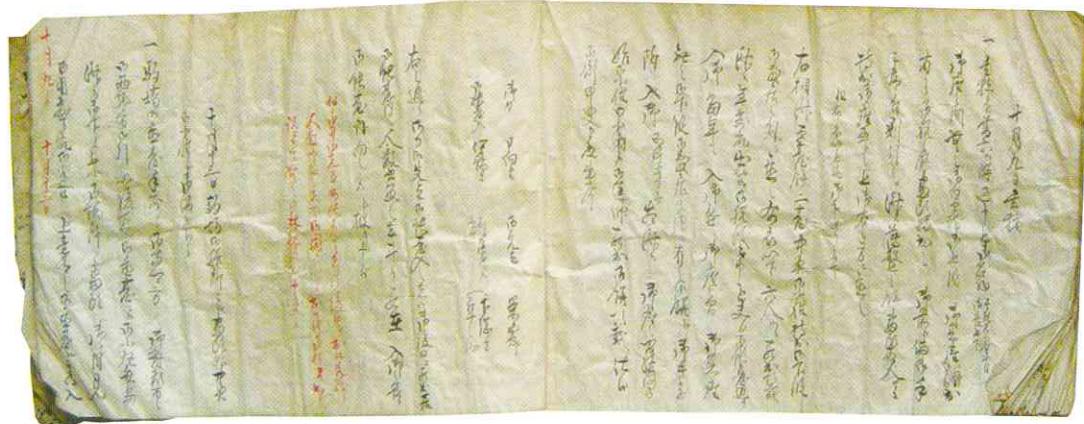
短冊 清水谷
大納言家季 筆



短冊 駒場野にて

植村家の御薬園預の仕事の中で、特筆されるのが、朝鮮人參の栽培育成です。朝鮮人參は、当時万病薬として多くの需要がありました。栽培方法は、手探りの状態でなかなか成功しませんでした。しかし、苦心の末、育種による栽培が成功したことにより「御種人參」と呼ばれ、多くの病いを克服していきました。ここで紹介する資料をひもとくと、世襲された植村家の仕事が、御薬園預という役職以外にも、臨時の補佐役としていろいろな役どころを命ぜられていました。これがわかります。御薬園と屋敷を共にしていたことから、鳥見役の補佐などを勤め、御鷹狩のみならず、鹿狩の事前演習などにも参加しています。また将軍直々の御出棺御葬送御行列

や日光御社参の御用、芝居小屋移転一件、尊皇攘夷関係一件などには、隠密御用を務めていた一端をうかがうことができます。さらには政養筆の野帳や、和歌短冊から、武家からの文書を朝廷に取り次ぐ公卿(武家伝奏)^{ぶけでんそう}の用務も勤めていたことがわかります。



『野帳』 政養 筆

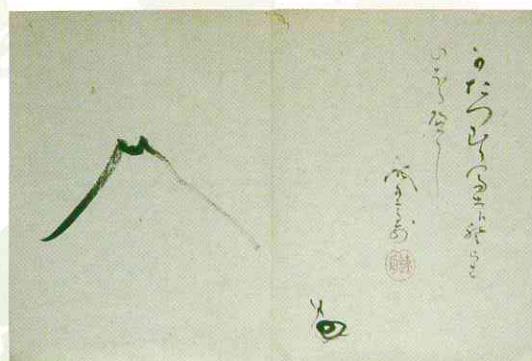


『山岡鉄舟書状』

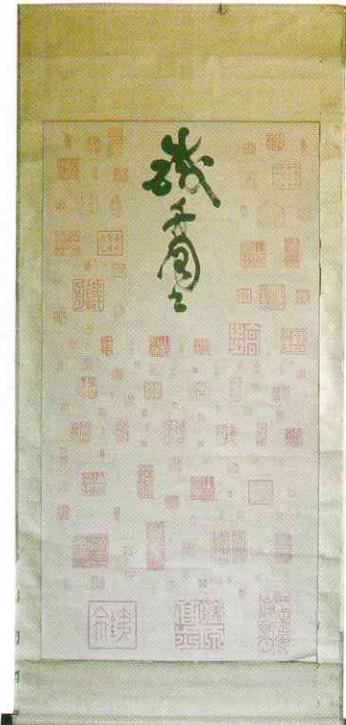
直轄の薬園であった駒場御薬園は、江戸幕府の滅亡とともに閉鎖されますが、その広大な敷地は明治政府に引き継がれ、木戸孝允邸、青木周蔵の所有を経て、近衛輪重兵第一大隊・騎兵一連隊が置かれ、第二次世界大戦後は、東京都立駒場高校が移転開校し、現在に至っています。また、植村家は、御薬園の任を解かれましたが、明治天皇の母方にあたる中山大納言家と出入りがあったことや、左平太政樹の義弟が山岡鉄舟であったことから、徳川家のみならず天皇家とも親交がありました。鉄舟は、小野家の出身で、一刀流の剣術家でしたが、槍術家山岡家の妹と結婚。山岡家は、長男静山が跡をつぎ、次男は、槍術家に婿入りした高橋泥舟でした。後に静山の死去により、鉄舟は、山岡家に婿入りし、幕府講武所にて剣術教授方世話役、明治政府では、宮内省に請われ、天皇側近として仕えました。また、左平太政樹の兄弟であった植村政平は、幕末より中山大納言家に仕え、明治時代になっても、鉄舟の役務を助けていたと考えられます。



ふくさ



『色紙・下絵綴』



『山岡鉄舟印譜』

江戸時代の民間医療と製薬

江戸時代は、鎖国によって海外の情報・文化・技術がまったく入手できないように感じられます、国交を残していた中国からは、たくさんの書物が流通してきました。その中には、中国独自のものもあれば、中国に紹介された他国の知識も多数含まれていました。

医療が一般民衆にも普及するにあたって、当時の医学、薬学について総合的にかつ簡便にまとめて紹介したのは、貝原益軒です。彼は、『養生訓』という医学普及書の中で、中国の医師と彼らの著作を紹介し、その著作の内容が新しい医学技術として広く普及していました。同時に『大和本草』という本草学の書物の中では、中国で使われている薬品の原料になる薬草木などを、図を交えて紹介しました。

医学・薬学については、その伝来によって漢方・蘭方に分けられますが、この地域を含めた農村部では、医師のほかに修験の存在を見逃すことはできません。修験では、その活動背景から、

採薬、製薬、加持祈祷、護摩供養・護符配布、また山の生活での救急術など、当時の医学・薬学の専門家として独自の活動を続けていました。またその手法が科学的であり、非科学的であり、現代の医師あるいは薬剤師と同様に重要な役割を果たしていたと考えられます。

特に、売薬では、修験から広められた薬として立山の「熊胆」(「よもぎねり」)、熊野の「陀羅尼助」(「だらにすけ」)、木曾御岳の「百草」、伊吹・鈴鹿の「伊吹艾」(「いぶきもくさ」)は有名でした。また仏教信仰の中では、唐招提寺の「奇効丸」、「奇効丸」の流れを汲んだ「六神丸」、「三光丸」、東大寺の「奇應丸」、西大寺の「豊心丹」、比叡山施薬院の「奇應丸」などがありました。一方、外国からの伝来薬として、肥前田代の「奇應丸」「万金膏」「千金丹(奇神丹)」、佐賀の「唐人膏」「烏犀圓」などがありました。そこに行商「薬売り」(売薬)の普及により、越中富山、大和、近江日野、佐賀田代などが名を広め、伊勢の朝熊万金丹のような土産物までに普及しました。売薬の由来にはまだ解明されていないものも少なくありませんが、そこには秘められた壮大な歴史が隠されているかもしれません。



版木 陀羅尼助



版木 保童消積丸

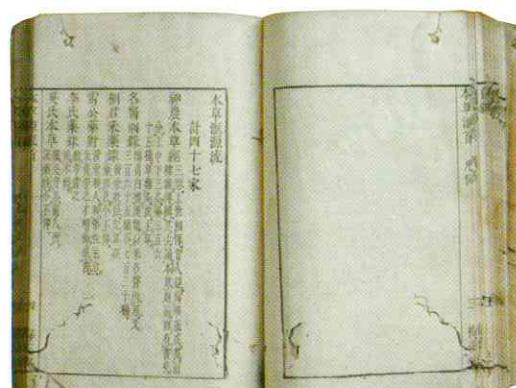
館蔵資料にみる江戸時代の医学薬学の系譜

いろいろな意味で、日本が中国の影響を受けていることは、誰しも感じるところですが、ここで取り上げた医学薬学の世界でも同様なことがいえると思います。中国の医学は、その生活文化と切り離すことができない部分が多くあります。例えば、「医食同源」という言葉にも言い表されているように、食生活そのものが健康に大きな影響を与えていたことにも由来していると考えられます。こうした生活文化は、それに係る周辺の地域にも広く波及していきました。

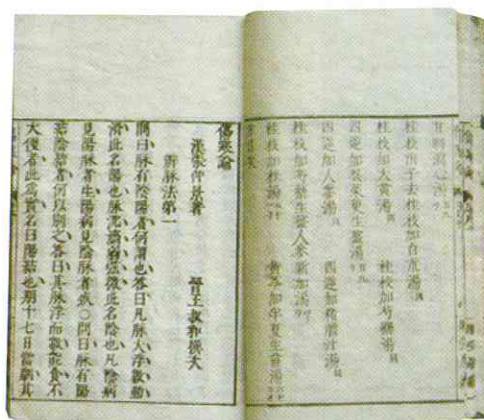
中国の医学は、漢の時代に中国最古の薬学書『神農本草經』(『本草』)、医学の根本「素問」と鍼灸に係る「靈樞」とをまとめた基礎医学書『黃帝內經』(『内經』)、張機(仲景)がまとめた臨床医学書『傷寒論』が編纂されたことにより、体系化されたといわれています。宋の時代になると、部位や症状によって専門科目が分類されました。ここでは小児科の錢乙(仲陽)などが有名です。また、金・元の時代になると、病気の原因についての考え方から劉完素(守真)、張從正、李杲、朱震亨(丹溪)の医法をついだ四大学派が生まれました。明・清の時代になると、西洋医学の流入もあり、古い医学書の校訂・改訂が加えられました。明の李中梓、清の汪昂などは医学の教科書のように使われました。

日本の医学では、室町時代に田代三喜が明にわたり、李杲、朱震亨の医学を学び、帰朝して弟子の曲直瀬正盛(道三)に伝えました。道三の一派は後に李朱学派(後世派)と呼ばれ、日本の内科学の主流になっていきました。

江戸時代初期には、医学哲学として儒学とともに朱子学の思想が取り入れられることにより、医者は「儒医」と呼ばれるようになりました。医学の世界では、劉完素(守真)、張從正の医学を継承した劉張学派(後世別派)が生まれました。この流れのひとりである岡本一包



『本草匯』1 李中梓 撰 郭佩蘭 集



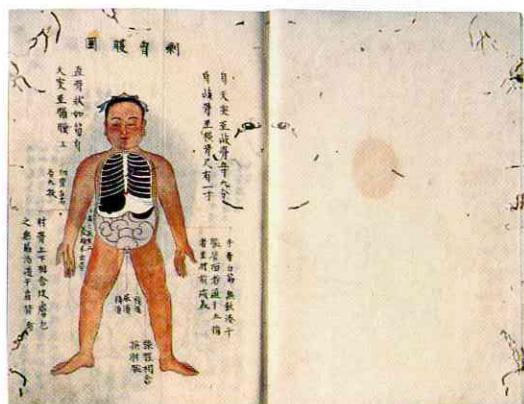
『傷寒雜病論集』 張機(仲景)撰 香川修徳(秀庵)集



『錢氏小兒直訣』卷 1.2合 錢乙(仲陽) 撰



『済民記』卷二 曲直瀬玄朔(道三)著



『病相神論』

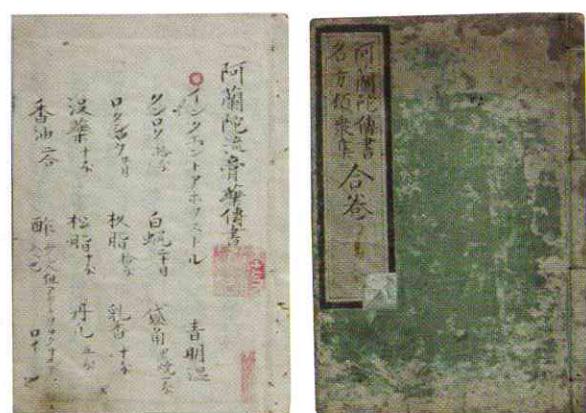
これに基づき広まったのが山脇流内科です。また彼が在野で見出したのが吉益東洞(為則)です。独学で医書を読み古医方に進んだ東洞は臨床で治療効果を診ていく中で、病気の元が身体の中の「毒」に原因があり、その「毒」の活動によって病気が出るという考えを示しました。これは万病一毒説と呼ばれ、万人にも理解しやすいことからたいへん普及しました。

徳川吉宗が就任すると、青木昆陽、野呂元丈に蘭書を講習させ、これにより、西洋医学が流入されます。いわゆる阿蘭陀流と呼ばれる蘭方普及による西洋医学の流入と、古医方をはじめとする臨床医学における実証性から、江戸時代後期の医学は、大きく進歩していきました。埼玉県内でも、入間郡内で活躍した小室元長・伊古田純道は、西洋医学の研鑽により帝王切開の技術を習得し、外科学の一部であった産科学で独自の成果をあげたといわれています。蘭方は時代の評価により左右されることがありました。古医方において、日本で初めて人体解剖を行った山脇東洋がその技術を広く普及させたことで、当時の医療の水準を維持するのに貢献したと考えられます。

(為竹)は、中国医書の解釈本を多く編集し、医学への理解を広めることに尽力しました。また、李朱学派(後世派)、劉張学派(後世別派)に対して、『黃帝内經』と『傷寒論』を中心に臨床医学を重視して実践した名古屋玄医がいました。この一派は古医方と呼ばれ、弟子には香川修徳(秀庵)などがおり、儒学と医学の兼備を説きました。この時期で特筆すべきは、貝原益軒の存在です。彼の著作『養生訓』には、健康を維持するためにはどうしたらよいか、ということが述べられていますが、この中に医書として『黃帝内經』『神農本草經』のほかに、張機、錢乙、劉完素、朱震亨、李中梓、さらに明の李挺、龔廷賢(子才)などの著作は医者になるためには一読しておく必要があるとしています。江戸時代中期、古医方では、山脇東洋がいました。禁中の御典医であった彼は刑死した罪人を解剖して、書物に描かれた内臓を比較し、記録に残しました。

よしますとうどう いそく

これによると、山脇東洋は、禁中の御典医であった彼は刑死した罪人を解剖して、書物に描かれた内臓を比較し、記録に残しました。



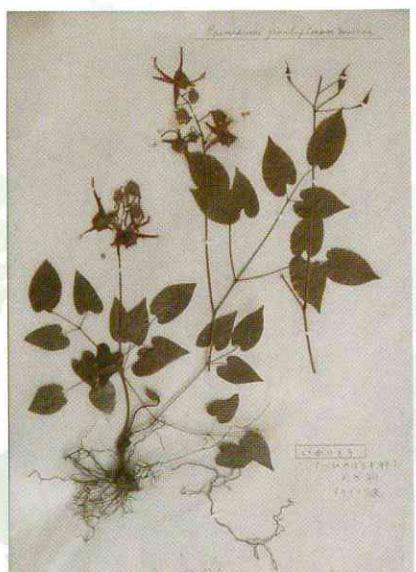
『阿蘭陀流傳書・名方類衆集』写

駒場御薬園で栽培されていた薬用植物 —遠藤信次郎収集植物標本の中から—

駒場御薬園では、植村家によって日本各地で採集された薬用植物が移植・栽培され、株数を増殖し、幕府御薬園はもちろんのこと、各藩薬園、私設薬園にまで、譲り渡されていきました。ここに展示したのは、当館で所蔵している遠藤信次郎収集植物標本の中から、駒場御薬園で栽培されていたと考えられる薬用植物の標本を展示しました。



センニンソウ(和威靈仙)



イカリソウ(淫羊藿)



ヤブラン(麦門冬)



遠藤信次郎 ©高橋彦一

遠藤信次郎

(明治43年(1910)～平成14年(2002))

明治43年(1910)年群馬県前橋市に生まれる。昭和9年(1934)狭山市入間川地内にて製菓業「伊勢屋」を営むかたわら、植物採集と写真を嗜む。植物採集については、昭和36年(1961)より独学で標本処置と同定を試みる。平成14年(2002)約40年をかけて狭山市内周辺で採集し、同定保存した植物標本1,700点余、67箱を、この地域の植生を知る上で重要な資料として、当館に寄贈する。

遠藤標本に見る 駒場御薬園で栽培された 薬用植物一覧

No.	植物名	科名	生薬名	主な効用	備考	標本番号
1	アカネ	アカネ	センソウ 茜草	止血・消炎・婦人病		902
2	アマドコロ	ユリ	イヌイ 萎蕤	滋養強壯		385
3	イカリソウ	メギ	インヨウカク 淫羊藿	滋養強壯・食欲増進・興奮剤		557
4	ウスバサイシン	ウマノスズクサ	サイシン 細辛	浴剤・去痰		456
5	ウツボグサ	シソ	カコソウ 夏枯草	降圧・利尿		839
6	オオバコ	オオバコ	シャゼンジ 車前子	万病薬		894-897
7	オケラ	キク	ビャクヅ 白朮	駆水		954
8	カラスピシャク	サトイモ	ハング 半夏	鎮吐		346
9	キキョウ	キキョウ	キキョウコン 桔梗根	鎮咳		922
10	キハダ	ミカン	オウバク 黃檗	止瀉・抗菌・歯止痛	百草、陀羅尼助、練熊	1199
11	サンシュユ	ミズキ	サンシュユ 山茱萸	強壯		栽1722
12	スイカズラ	スイカズラ	ニンドウ 忍冬・金銀花	腫れ・利尿・抗炎・抗菌		1308
13	センニンソウ	キンポウゲ	ワイルイセン 和威靈仙	利尿・外用鎮痛(毒性が強い)		543
14	ニッケイ	クスノキ	ニッケイ 肉桂・桂皮	健胃		1129
15	ハマボウフウ	セリ	ボウフウ 防風	疲労回復		県外1515
16	マムシグサ	サトイモ	テンナンショウ 天南星	皮膚病		350
17	ヤブラン	ユリ	バクモントウ 麦門冬	健胃・鎮咳・去痰・心臓病		374
18	ヤマウコギ	ウコギ	ゴカヒ 五加皮	堅骨強筋		1270
19	ワレモコウ	バラ	ジユ 地榆	うがい・浴剤・湿布		628

※上田三平著『日本薬園史の研究』、伊沢凡人、会田民雄著『薬草図鑑』等による。

※遠藤標本のうち、生薬名と植物種名の一致のみを抽出し、属名の一致については、これを省いた。

展示資料一覧

No.	資料名	著者名	年号	備考
1	『日本薬園史の研究』	上田三平 著	昭和5(1930)	初版
2	写真「植村重好」			額装
3	『植村家系図』			一巻
4	『先祖書』			一冊
5	絆・袴			
6	小田原提灯			
7	小柄・笄			
8	拓本「賽郭翁祠堂之碑」	皆川淇園 撰	寛政11(1799)	軸装、「森野薬園」森野藤助(賽郭)
9	『御出棺御葬送御行列之覚』		宝曆11(1761)	徳川家重、左平次政勝
10	『小金原鹿狩図記』上・下		寛政7(1795)3月	徳川家斉、左源次政辰
11	『野帳』	左平次政養 筆	寛政10(1798)	
12	『日光御社參御道中御宿泊御昼夜所の図』		天保14(1843)4月	徳川家慶、左平太政備
13	写真「山岡鉄舟」			額装
14	『山岡鉄舟印譜』	山岡鉄舟 書		軸装
15	『山岡鉄舟書状』	山岡鉄舟 書		額装
16	『山岡鉄舟書状』	山岡鉄舟 書		
17	『山岡鉄舟書状』	山岡鉄舟 書		
18	『色紙・下絵綴』	山岡鉄舟 書		
19	ふくさ	山岡鉄舟 書		
20	写真『徳川慶喜』			額装
21	盃 箱入り	萬川齋 作		徳川家拝領
22	和歌短冊			
23	『草木性譜』人之巻	清原(舍人)重巨著	文政6(1823)	
24	『医法大成論和語訳』4.5	岡本一包(為竹)著	元禄15(1702)	
25	『標註原病式』上	劉完素(守景)原著 玄倫編	延宝5(1677)以降	金代
26	『衆方規矩刪補』	北山道長(寿安)著	延宝4(1676)	
27	『萬病回春』新刊2.4	龔廷賢(子才)著	1588刊	金代
28	『錢氏小兒直訣』巻1.2合	錢乙(仲陽)撰 閻孝忠 集	文化元(1804)以降	北宋代
29	『医学入門』1.6	李挺 撰 林羅山 跡	万曆年間(元和3(1617))	明代
30	『合類医学入門』	八尾玄長 著	寛文6(1666)	
31	『本草匯』1.6	李中梓 撰 郭佩蘭 集	(寛文2(1662))	明代
32	『医方集解』	汪昂 著		清代
33	『格致余論』	朱震亭(丹溪)著		元代
34	『袖珍医便』1.3.4.5	蘆川桂洲 著	元禄3(1690)以降	
35	『病因指南』2.3.4.5.6	岡本一包(為竹)著	元禄8(1695)以降	
36	『医事或問』写 上・下合	吉益東洞(為則)著	明和6(1769)以降	
37	『大風秘方錄』写			
38	『傷寒雜病論集』	張機(仲景)撰 香川修徳(秀庵)集	正徳5(1715)	漢代
39	『済民記』巻二	曲直瀬玄朔(道三)著		
40	『山脇氏方函』			山脇流
41	『病相神論』		宝曆9(1759)以降	山脇流
42	『阿蘭陀流伝書・名方類衆集』写			
43	『萬病回春』新刊1.8	龔廷賢(子才)著	1588刊	金代
44	『萬病回春』新刻5	龔廷賢(子才)著	1588刊	金代
45	『医学治法大全』	岡本一包(為竹)著	正徳5(1715)	
46	『方極』写	吉益東洞(為則)著	宝曆5(1754)	寛政4(1792)写
47	『諸方集』写			
48	『新增細見京絵図大全』		文久2(1805)	文久改正
49	『三芝居座江被下候地割之図』		天保12丑年12月	芝居小屋移転一件
50	『控』		(1860以前)	尊王攘夷関連一件
51	版本			

1~22、48~50 : 植村家関連資料